

### シリーズ 校長先生が若かったころ ③

昭和40年代まで公立学校には宿直制度がありました。宿直というのは夜間に学校に不審者が入り込まないようにその学校の職員が泊まり込んで警備をする仕事です。警備と言っても9時ごろに1回校舎を見回って後は寝るだけですが…。

ですからどの学校にも必ず宿直室という和室がありました。学校でこの部屋だけは生徒から完全に隔離されていて、薄暗くてややかび臭いことさえがまんすれば、先生にとってはやすらぎの部屋でもありました。もちろん、こたつやふとんも常備されていました。

初任当時、宿直は校長以外の男子教員の当番制でした。しかし、小規模の学校では教員数が少ない上に小学校ではさらに男子教員が少なかったので家庭を持っている教員はこの当番が結構負担だったようです。そこで、若くて一人もん(独身)の私は教頭先生や、先輩教員からたのまれて、代わりによく学校に泊まりました。



すると、どこから聞いてきたのか、私が宿直の日には必ずといって近所の男の子たちが尋ねてきました。中には夜食まで運んでくれる気の利いた子もいました。「先生と夜の勉強会」と称して一応算数のドリルとかは持っては来るのですがはじめからその気はまったくありません。『子どもたちの間での新米先生の評価』や、『新米担任に対するうちのかあちゃんの批評話』だとかが話題の中心でした。私にしても算数や国語のドリルなどやるよりはるかに大きな関心事です。

中でも夜の校内巡視が本当は男の子らの最大の訪問目的でした。まるできもだめしでもするように懐中電灯をアゴの下から照らしておどかしたり、突然大声を出して怖がらせたりすることが一層連帯感を高める効果がありました。

次の日の学級の話の中心は宿直の話です。学校から家が遠い子や女の子たちは残念ながらこの話題には参加できません。でもこの子たちのために次の日曜日にハイキングや近くの川へ魚釣りに行く約束をしました。

廊下がきしむ古びた木造校舎でしたが、学校はいつも子どもたちの歓声と生活のにおいがしました。勉強ができるとかできないとかいう前に、子どもたちの成長のにおいがしました。私は静かに目をつむれば今でも38年前のそのにおいを嗅ぐことができます。

学校の宿直制度は教員の勤務条件の見直しによって昭和48年、教師2年目でなくなりました。